

波照間島総合調査にあたって

島 村 修

日本最南端の島：波照間島は北緯24度2分24秒、東経123度47分12秒にあり、四面を海に囲まれた隆起珊瑚礁よりなる小島で、面積は14.96平方キロメートル、海岸線総延長15キロメートルで東西に長い楕円形の島である。有人島では日本最南端の島である。因みに日本最南端は北緯20度25分に位置する南鳥島で、満潮時には海面下に没する環礁である。しかし、200海里の経済水域を確保するために、人為的に補強された無人島である。従って人間の住む島としては名実ともに、最南端と言ってよい。高那崎には1970（昭和45）年に観光の一青年によって「日本最南端の碑」が建立されたが、1995（平成7）年には、終戦50年を期して「日本最南端平和の碑」が行政によって建立された。

島の中央の標高最高部（海拔60メートル）には、1954（昭和29）年に灯台が建設され、付近を航行する船舶に最南端の光を送る重要な標識となっている。

波照間の名称については古く（15世紀中頃）「李朝実録」に「^{ホティローマイジマ}補月老麻伊是麻」と記されており、可成古くから「ハティローマ」と呼ばれていたと思われる。現在は、パチラー（波照間）・パチルマ（白保）・ハティローマ又はハティロー（石垣）等と呼ばれている。語源については、「果てのウール（珊瑚礁）の島」という意味で「パチウルマ」が転訛して「パチルマ」や「ハティローマ」になり「ハテルマ」になったというのが通説のようである。「波照間」という漢字の三字がいつ頃宛てられたかは詳らかでない。その他に島の人々や島出身者同志で「ベスマ」という呼び方があるが、これは島の名称でなく、「我が島」という意味である。ややもすると島外の人々に誤解されがちであるので付け加えておく。尚南端にあるのを強調して「パイパティローマ」と呼ばれることもあるが、島の人々は殆どそう呼ばない。島の人々のいう「パイパティローマ」は、波照間島の遙か南にあるといい伝えられている幻の島のことである。人頭税時代の1648年、楽土パイパティローマを求めて、40～50人位の人びとが島抜けをしたという八重山島年来記の記録があり、且つ島ではこれにまつわる「ヤグアカマリ」や「鍋カキマス」の伝説もあって「島抜け」の事実はあると考えられる。そういう事で「パイパティローマ」の存在は島民も、郷土誌研究家の間であっても関心事で、台湾の蘭嶼への探訪など試みられている。

島の自然とくらし：気候は亜熱帯海洋性気候で台風常襲地帯である。年平均気温は摂氏24

度・年平均降水量は1770ミリメートルで八重山群島内では少ないほうである。この気象条件、とくに台風と降水量が島の生活を左右する最大条件となっている。従って、島の歴史も文化も台風対策と水問題の解決に他ならない。昭和初期から戦後にかけて、波照間の人々は「セメント民族」と揶揄されていた。それは竹富町のセメント消費量の約90パーセントが波照間の人々によって占められていたからである。四隅や外壁をセメントで囲った頑丈な住居、天水を貯めた大きなコンクリート造りの水タンク等、今も島の各所で見られる。最近の沖縄の住宅は鉄筋コンクリート建てが主流を占め、上水道が普及し、波照間でも鹹水の淡水化プラントが導入されているが、地球にやさしい水問題として、「雨水利用」が地球的にクローズアップされている。コンクリート造り住宅の先取りといい、雨水タンクといい、波照間の先人の慧眼を見逃してはいけない。尚波照間の古い祭事や神行事は、雨乞や雨への感謝と水に関するものが主軸をなしていることを付け加えておく。

土質は珊瑚石灰岩を母岩とする島尻マージが主で、海岸地帯にはカニヤグ地又はシィサバと呼ばれる砂土ないし、ササラと呼ばれる砂礫土や砂と島尻マージが適当に交じったメーラ地と呼ばれる砂質壤土等が僅かに見られる。尚最近、土地改良により地中から掘りだしたクチャー（島尻層の泥灰岩）を客土した新しい土壌が造られている。

植物相は至って単純で蘚苔類を含めても300種内外程度と考えられる。植生は本来なら常緑広葉樹林で覆われていると思われるが、殆ど人為的に攪乱され（農地として開墾）僅かに島の中央部の白朗原御嶽や阿幸俣御嶽・真徳利御嶽等の拝所に見られるにすぎない。海岸の岩磯や砂浜地帯にはそれぞれ典型的な「隆起珊瑚礁上植生」や「亜熱帯性海浜植生」が見られる。

動物相も貧相で、家畜・家禽や犬猫などのペットの他に脊椎動物は鳥類を除けば、10指を僅かに越える程度であると考えられる。甲殻類や昆虫類以下の無脊椎動物についても狭い島嶼のうえ、最近の土地改良事業による森林や草原の減少、水田の畑化等による植生の単純化により、その減少や絶滅が危惧される。野鼠駆除のため導入されたイタチが野鳥（ミフウズラ）やヤシガ二等を捕食し、その数の激減が報告されている。

日本最南端という地理的な条件と、海洋中の一孤島で人間生活による大気汚染度が低く、尚大気透明度が高いという好条件で、1992（平成4）年国立地球環境モニタリングステーションが建設され、1994（平成6）年星空観察タワーが建設された。

政治権力に翻弄された島：波照間の歴史は先史時代に於いても前近代に於いても八重山の歴史の上で重要な地位を占めており、且つ有史時代に入っては、ときの政治権力に翻弄された悲劇の歴史といえる。

即ち先史時代やスク時代を自主独立の時代とするなら、有史時代に入っては屈従の時代

である。

考古学の調査研究によると下田原貝塚は八重山では最古の仲間第一貝塚に次ぐ古い貝塚とされており、その出土の土器は下田原式土器と名づけられ、歴史編年の重要な資料となっている。従って八重山の考古学には必ずでてくる用語である。その他にも波照間には大泊貝塚や、スク時代のブリブチ・タカフク・ヨウブチ等の遺蹟や城址があり、それにまつわる豪傑や女傑の伝説等も多い。アラブチブラとパーミシクブラとの戦いや、カンチアジマグとユナチマヤの戦い、女傑ピタブパメやヤマダブパメの伝説など枚挙に暇がない。

1500年オヤケ赤蜂の乱の双壁長田大翁主や、赤蜂に従わず殺害された明宇底獅子嘉殿も波照間島の生まれである。その後琉球王朝支配下にあっても、波照間は八重山歴史の中心的な史実が多い。前掲のヤグアカマリの「島抜け」事件や1755（宝暦5）年、祭温の政策、寄百姓によって西表島の崎山へ新村建のための強制移住。1771（明和8）年、大津波の時の大浜村や白保村への強制移住などはあまりにも有名である。話は前後するが、その他にも1713（正徳3）年に白保村へ。1734（享保19）年に西表島南風見村へと実に、約60年の間に四度も強制移住をさせられたのである。歴史は繰り返すというが、まさに、1945（昭和20）年、第二次世界大戦末期の西表島南風見へ、日本軍による全島民の強制疎開等、何か因縁めいたものを感じずにはおれない。

今一つ波照間の歴史研究の上で重要なことは、琉球王朝時代、波照間島は、政治犯流刑の地であったということである。これが島の文化や、島民性や色々な面で深い関わりをもってきたと考えられる。このように多彩な歴史を持ちながら、波照間島の歴史は先史時代の下田原貝塚の研究はさておき、スク時代や、その後の歴史はよく知られていない。特に琉球王朝時代の歴史、なかでも、前記寄百姓時代の島の百姓の生活、政治犯流刑の状況や、住民との関わり、当時の島の役人の人事往来など。今後の大きな研究課題といえよう。口承によれば、当時のオーセ（村番所）が前後二度にわたる火災により、古文書、記録などすべて焼失してしまったというが、これを補完する資料はないだろうか。因みに筆者は戦後1947（昭和22）年、オーセ（現在は公民館）で公文書を見せてもらったが、いちばん古い文書は明治初期（年月日忘却）の三条実美公より発せられたものであった。

昔は波照間はユンタ、ジラバのメッカで、波照間の人とはユンタ、ジラバの「かけ」はするなど言われていたという。ユンタ、ジラバは人頭税によって束縛され、苛酷な労働を強いられ、虐げられた百姓が、逃れる術がなく、互いに肩を寄せあって畑を耕し、家を立て、助け合って生活を支え合う原始共同体的生活の中から生まれたという。従ってそれは、畑仕事や家造り、オーデラー（公の労務賦課）など共同作業の場で生まれ、謡い継がれて来たといえる。したがってユンタ、ジラバに強いという事は、共同作業が盛んであるということである。波照間における共同作業は「ボー」と呼ばれる仕組みで行なわれていた。

いわゆる「結い廻」である。5～6人の小さいボー。40～50人の大きなボー。開墾、草とり、収穫等の畑仕事。冠婚葬祭の薪とり、精米。家造り等労力の結い廻の他に、金銭や物品の結い廻も盛んに行なわれていた。「ボー」は戦後昭和30年代まで盛んに行なわれていたが、大型製糖工場導入を節目に農業も五穀中心から甘庶作へと変わり、鍬、籠農業より、自動耕耘機、ハーベスターへと機械化された。生活様式も変わって昔の面影はない。しかし、今も甘庶収穫には「結い廻」の精神は生き続け、「刈取組」として残り、運営も現代化されて威力を発揮している。因みに昔あれほど強いといわれたユンタ、ジラバも、第二次世界大戦の戦争マラリアで謡手の古老の殆どが亡くなり、ユンタ、ジラバも彼らと共にあの世に持ち去られたのも多いという。

島の生業の移り変わり：島の生業は有史以来数百年五穀中心の農業であった。その中で一時漁業が大繁盛し幅をきかした時代もあったが、1963（昭和38）年波照間製糖工場（100トン）の導入によって画期的変革を遂げ、自給自足的農業から脱却して現在にいたっている。今その移り変りを少々立ち入って考察してみる。

1952（昭和27）年下田原貝塚の発見により、波照間でも狩猟を生業とした時代もあったことがわかった。しかし島の口承、伝説には、貝塚時代と結びつくのは殆どない。ただ石斧の存在は知られ、「ムガヌブヤイシピラ」（大昔の爺さんの石籠）と言われていた。スズメノコビエの方言名を「ユスパリヤ」という。その由来は、ムガヌ（大昔の）ブヤ（爺さん）が、イシピラ（石籠）でユスパリ（小便）のぬける程苦勞してようやくそれを根こそぎしたことに由来するという。又、島には珊瑚石灰岩の石垣が至る所にあった。（現在は採石や土地改良でなくなった）それは開墾時にでた石を積んだものであろう。その石垣の上ではノビル（野蒜）が生い茂っていた。その昔、人口稠密で、畑の少ない人々が、雨上りに大草鞋をはいて、他人の畑を歩き、草鞋に付いた土を体よく盗んで石垣の上に乗せ栽培したという伝説がある。石斧で農耕をしたかどうかは定かでないが、可成古くから農耕が営まれ生活の手段にしていたのは間違いないようだ。

戦前の島の農業は原始的、粗放農業で、生産性至って低く、降水と台風の如何に左右され一度早魃や台風に襲われると、飢饉となり、いわゆる蘇鉄地獄の到来となる。でも波照間では、如何なる大きな飢饉でも餓死者は殆ど無かったという。それは蘇鉄を食糧として利用する生活の知恵があったからである。それは第二次世界大戦後、昭和20～21年で証明済みである。もし波照間に蘇鉄が無かったら、戦争マラリアの被害は倍増し、島は全滅状態になっていたであろう。島の生活史で蘇鉄の存在は見逃せないので特記した。因みに、島民が戦争マラリアを克服してようやく生きる望みがでた昭和24年頃、蘇鉄への感謝祭が島をあげて挙行された。それは波照間における蘇鉄の元祖といわれる大泊海岸東端岩上の

蘇鉄に感謝の祈りを捧げ、その実を公民館の祭壇に飾って行なわれた。

さて、大型製糖工場導入以前の農業は天水田の耕作と、畑作の他、役用牛馬に養豚、養鶏、養蚕等細々ではあるが割りに多角的に経営されていた。天水田の特殊な耕作も興味深い。ここでは農業の中心であった畑作についてその概要を述べる。

シイサバ畑・メーラ畑：海岸沿いの砂土とそれと隣り合う砂質壤土である。稀にササラ畑と呼ばれる砂礫土がある。いずれの場合も当時の主食、甘藷の連作が行なわれた。冬、整地をして2～3月植え付け、夏、収穫するいわゆる夏いも畑である。アリモドキゾウムシ等の害虫が少ないのが特徴である。でも台風の襲来があれば、一時にして塩ゆでにされ枯れてしまう。夏の収穫がすめば後の半年は休耕して牛や山羊の繋ぎ場となり、地力をつけて来年を待つのである。

ウガリ畑：ウガリとは小高い丘陵状の地形をいい、それは隆起珊瑚石灰岩で出来ている。その上の極く薄い層の腐植質の多い畑で、水はけがよく、旱魃に至って弱い。主に冬季に粟をまきその間に約1メートル間隔に甘藷を植え付ける。粟収穫後は甘藷畑となる。収穫（いも掘り）は先の尖ったいも掘へらで「探り掘り」をする。その際、長くのびた蔓の中程を地中にうめて、節からの発根を促し、そこに芋を太らせる。これをシーヌソーという。これに対して、植え付けた蔓にできる芋をニーヌソーという。こうして一年おきに更新し繰り返す。10年ほど耕作すると地力が衰えるので休耕して蘇鉄や阿壇、灌木を繁茂させて地力をつける。10年ほどして地力のついた頃、焼畑開墾をする。

トー畑：トーとは「低くて平ら」という意味があり、一般に広くて平坦で土層も深い赤土（島尻マージ）で出来た畑をいう。各家庭で、一番広くて耕作しやすく便利な位置にあり、生産の主力となるトー畑をその家の「ブシドーマシドー」と定め、種取祭など農耕祭事を中心となる。トー畑の作付けは、一年次は秋の終わり頃粟をまき、その除草、間引きのとき、小豆を適当な距離にまく。粟は5～6月、小豆は7～8月収穫する。二年次は、秋の初めに小麦をまき、3月頃収穫したらすぐ鋤起こして下大豆をまく。下大豆は秋の終わり頃収穫する。このように粟、小豆、小麦、下大豆と二か年サイクルの輪作を行なう。

漁業については、大正初期に従来の生活に飽き足りない進歩的青年達によって、鱈漁業が導入された。その後は帆船から、焼玉、ジーゼルと動力つき漁船へと発展し、一時期（昭和10～20年）はその総数9～10隻に及び隆盛を極めた。当時の漁業組合長故仲本信幸氏の話によれば、島の戸当たりの年間所得は沖縄県平均をはるかに上回り、貯蓄高は県一位であったという。

鉱業については大正から昭和初期にかけて燐鉱石（グアノ）の採掘が試みられた。一時期は、二つの会社を吸収合併した大阪朝日化学肥料株式会社が華々しく操業したが、第二次世界大戦のため、鉱石の輸送が困難となり、且つ貧鉱で採算が取れないとの事で、昭和

16年には閉山している。しかし操業中は数百人の従業員が来島し、島の男女青年も多数雇用され、島の経済を大いに潤し賑わったという。

島が一番賑わったのは、昭和10～20年頃である。鯉漁業の隆盛、燐鉱山の操業・それにその頃は珍しく降雨多く、天水田の豊作が続いた。でもそれは、日中戦争から第二次世界大戦と戦時統制経済のなかで、食糧増産、国内資源の開発という国策による景気であったという。まもなく昭和20年には軍命による西表島南風見へ疎開、そして戦争マラリアですべての物を失ってしまうのである。

マラリアを克服した1949～1950年頃から漁業は戦前の余勢を借りて、鯉漁業を復活させた。農業も現代化を目指し、換金作物として玉葱栽培や動力による小型製糖工場の導入、養豚、養蚕、養鶏等も試みたがいずれも、国の工業化政策による労働力の都市集中、農漁村の過疎化の波には勝てず、大正元年導入され、半世紀余り続いた鯉漁業は昭和40年代には遂に姿を消した。農業も前述のように、昭和38年大型製糖工場導入により甘庶単作の時代となり現在に至るのである。

これからの課題：農業基盤整備事業（土地改良）前の波照間を知る者が、久しぶりに島を訪ねて驚くのは島の景観の変貌である。それは農道によって碁碁目のように整然と仕切られ整備された広い甘庶畑である。岩石の掘削や客土・土地の分合整理・農道整備等により、機械化農業が可能になり、地力は増大した。従って生産力が著しく向上し、人々の生活が豊かになった。しかし、その反面、いろいろ負の現象を惹起しているのも事実である。赤土による海の汚染、豪雨時の洪水や表土の流失、地下への浸透水の減少、地下水汚染、森林や草原の減少による潮害、その他生態系の攪乱単純化により、小動物の絶滅にも繋がりがねない。小さな島ほど生態系は小さく脆い。この負の面をいかに克服し改善していくか、農業後継者問題やその他農業経営問題とともに重要な課題である。

参考文献

- | | |
|---------------|--------------|
| 宮 良 高 弘 著 | 「波照間島民俗誌」 |
| コウネリウス・アウエハント | 「HATERUMA」 |
| 波照間民俗芸能保存会発行 | 「波照間島のムシャーマ」 |